

藤堂明保編

學研
漢和大字典



学研 漢和大字典



藤堂明保 編



学習研究社

学研 漢和大字典

定価 4300円

昭和53年4月1日 初版発行

昭和56年2月1日 第10刷発行

編 者 藤 堂 明 保

発行人 渡 部 ひ ろ し

編集責任者 大 山 治 義

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

発 行 所 株式会社 学 習 研 究 社

(〒145) 東京都大田区上池台4-40-5

振替・東京8-142930番

© GAKKEN 1978 本書内容の無断複写を禁じます。

☆この本の内容に関するお問い合わせ、製本上のミスなどがありましたら、下記までお願いします。

文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)

学研お客さま相談センター「学研漢和大字典」係

電話は、東京(03)720-1111(大代表)

0581-241-205-1002

編者のことば

この字典の執筆にとりかかってから、なんと十六年もの歳月が過ぎ去った。その間、執筆・校正の日々であった。今までの中国の辞典と日本の漢和辞典を見渡してみても、たとえば「服」という字が、なぜ、(一)服従の服と、(二)衣服の服という意味に使われるのかの疑問を解説したものがない。「服」とは、「びったりとくっつく」という意味だからこそ、びったり体につける服を衣服と呼ぶのである。また、布帛の布とは「平らに敷きのばすもの」という意味だからこそ、公布という場合には、しきのばすことを意味する。また、しきのばす動作を敷ともいい、ひろくしきのばすことを、普及の普という字が表すのである。この場合には、布一敷―普は、明らかに同系の「言葉の仲間」だといってよい。

だが、こういうとらえ方をするためには、何よりもまず、漢語の音韻論を武器として、周・秦・漢のころの「上古漢語」において、どれとどれの言葉が同じ発音（または、きわめて近い発音）であったかをたしかめなければならぬ。日本流になまった吳音読みや漢音読みで「同音」だからといって、上古の漢語でもそうであったとはかぎらない。また、甲骨文字や金文という古い字形の暗示するすがたから、原初的な文字の表そうとした意味をくみとる心がけも欠かせない。それだけの用意もなしに、たんなる古典学者や漢文の先生が字典を書くのは「木に縁って魚を求む」たぐいと言わざるをえない。

この字典では、音韻論によって復原できる発音の姿を「上古（周・秦・漢）―中古（隋・唐）―中世（宋・元・明）―現代（北京式ローマ字綴りもそえた）」の四段式に分けて、おもな親字につけた。さして重要でない字については、右のかわりに「某と同音」と記したが、これは、中古漢語をあらわす「広韻」や「韻鏡」において同音だという意味であり、上古において同音だとはかぎらない。

また、各字ごとに「**關**」の項を設けて、原初的な字の成り立ちと、その表そうとした意味を解説した。さらに、同系の「言葉の仲間」を付記することによって、中心となる意味の理解を助けるようにした。また、紛らわしい類義語があるときには、相互の違いにも触れた。

最も苦心したのは、①②③……と続く「意味」の解説である。先の例に示したように、動詞や形容詞・名詞など、さまざまな用法があるさい、その間には意味のつながりがあるはずである。それを見落としては字典としての値うちがないし、利用するがわでも、まとまった印象をくみとれない。この字典では、最も原初的な用法を①に紹介して、以下つぎつぎに派生義を説くのを原則とした。しかし、常用される用法を先にして、利用者の便宜をはかった場合もある。また、日本の古訓の中には、その漢字の意味を理解するのに正しい方法を教えてくれるものもあるので、資料としてあげた。

字典づくりは、職人の仕事である。ひと刻みずつ彫りこむ職人のように、私も一字ずつの解説に念を入れてはきたが、なにしろ字が多い。見落としや、前後のくい違いが見つかるたびに、朱筆を加え、削ってはまた書きたし、書きたしては、くい違いを直した。そのたびに、編集部と、図書印刷の皆さんにご迷惑をかけた。我慢に我慢をかさねて、よくも今日までもちこたえてくださったものだと感謝にたえない次第である。

専門語の校閲と、付録の「中国の名著」「中国の詩」「中国文化史年表」については、学界中堅の俊秀を動員した。「中国の文字とことば」は、私みずから執筆した。また、本文中の資料図と「中国歴史地図」については、中国考古学・史学畑の大家の手を煩わせた。今までに例をみないりっぱなものである。ここにつつしんでお礼を申し上げる。

最後に、今一度、学習研究社社長古岡秀人氏には、終始変わらぬ御厚情をいただいた。ここに、衷心より厚くお礼を申し上げる。さらに、学習研究社専務取締役渡部ひろし氏、辞典編集部長大山治義氏、編集長川口久彦氏、亀岡紀子氏、また、図書印刷株式会社森繁俊・秋山明生・図師毅・渡辺英一・川端良一の諸氏の御尽力に対し厚くお礼申し上げる次第である。

昭和五十二年七月

藤 堂 明 保

凡例

■ 親字について

(一) 收錄範圍

この字典には、左の基準によって、約一万一〇〇〇字の親字を収録した。

- (4) 当用漢字一八五〇字、人名用漢字九二二字、追加人名用漢字二八八字、当用漢字補正資料によつて当用漢字表に加えられる漢字二八八字、新漢字表試案（昭和五十二年国語審議会報告資料）にみえる漢字。

(四)『現代新聞の漢字』(国立国語研究所報告資料)にみえる漢字

(二)漢字の意味を系統的に理解するために必要な漢字

(ホ)使用度の高い国字。

(二) 配列方法

(イ)『康熙字典』に準じた部首の順による。ただし、その漢字の成り立ちから判断して、他の部首のところに移動させた場合もある。

(ロ)同一の部首の中では、部首を除いた部分の画数の順。同一画数の中では、一般的な漢字音の五十音の順。訓のみの国字は、その訓の五十音の順。

(イ) 当用漢字と人名用漢字は、それぞれ「当用漢字字体表」(昭和二十四年内閣告示)「人名用漢字別表」(昭和二十六年内閣告示)で示された字体の部首・画

数のところに配列した。ただし、発表された字体が、従来の部首を含まなくなつたものは、便宜上、新しく設けた部首のところに配列した。

(三) 見出しの

親字の見出しは、左のように示した。

例

乗

a —
b —
c —
d —
e —

- f
- g
- h
- i
- j
- k

10
【名】
(2)
ヨウ(ウ) (イ) (ウ) (エ)
(平) 蕭(宵)

1 — 2-yieu-iieu-iau (yáo)

g	f	e	d	c	b	a
歴史的かなづかいによる音			用漢字・教育漢字（当用漢字別表の漢字）・人名漢字などの区別		部首と、部首を除いた画数	
現代かなづかいによる音			「当用漢字字体表」に示される以前の旧字体		「当用漢字字体表」などに示されている漢字	

(四) 字体

(イ) 当用漢字・人名用漢字・追加人名用漢字・当用漢字補正資料にみえる漢字は、それぞれ、「当用漢字字体表」「人名用漢字別表」「追加人名用漢字表」(昭和五十一年内閣告示)「当用漢字補正資料」(昭和二十九年國語審議會審議報告)

(ロ) (イ)に含まれない漢字、および「当用漢字字体表」などによって示される以前の旧字体については、比較的広く通用している字体を採録した。

(ハ)旧字体は、親字の下に示した。ただし、単に活字の形だけの相違で、字体の本質とは関係がないと思われるものは、とくに旧字体とはしなかった。

(二) 通用している旧字体に二種類以上ある場合は、とくに広く通用しているものまたは、その漢字の成り立ちから判断して原形に近いものを採用し、他を異体字とし「**異体**」の下に示した。

(ホ)いくつもの漢字に含まれる共通の要素は、なるべく統一した。

（例） 𠂔（即・啣など） 𠂔（繼・潛など）

（ハ）「当用漢字字体表」などによって示された新字体が、二つ以上の旧字体の音

と意味をもっている場合は、**二**で区別した。

〔例〕

予 (4) 教

彖 9

豫 (16)

(五) 音・訓・読み

(イ) 字音は、吳音・漢音・唐宋音・慣用音の区別をして、まず現代かなづかいで、それを示し、歴史的な字音がなを(一)の中に示した。そのさい、国語資料に未

見の音であつても『広韻』と『韻鏡』によって同音字から、呉音・漢音を推定して示した。

(ロ)「当用漢字音訓表」(昭和四十八年内閣告示)に示された音と訓は、
の下に音はカタカナ、訓はひらがなの太字で示した。

(ハ) 音の相違が意味におよぶ場合は、㊦㊧によって区別し、音と意味とを対応させた。

(二)意味の理解をたすけるために、一般に定着している訓、漢文訓読のさい、しばしば使用される訓、日本の古訓資料の中で、すでに日本語の読みとして定

着した訓などを選び、各品詞の下に太字で示した。その場合、文語形が現代語と相違するもの、また、現代かなづかいと相違するものは、その文語形を歴史的かなづかいで（一）の中に示した。

（中）その漢字が漢文訓読のさい、サ変動詞・形容動詞、および副詞の形で用いられるものは、その形を品詞の上に示した。

（例）**（動）** 形 人あたりがよくて、口先がうまいさま。

②（動）口先うまくとり人、おもねる。

（六）四声・韻

親字の下または左に、その漢字の四声と韻を示した。ただし、金・元代の「詩韻」は通俗書であり、言語資料としては役に立たない。そこで各字についてまず「詩韻」の韻を示し、ついで（一）の中に「広韻」の韻の名を示した。両者が同じ韻であるときは、この手続きを省略した。

（七）中国語音

（イ）おもな親字の下または左に、上古・中古・中世・現代までの音の変遷をローマ字で示した。ただし、中世（十四世紀）に成立した「中原音韻」は収録字が少ないので、同音の字から推定した音を示した場合がある。現代の北京語の音については、「漢音拼音方案」による「一・マ字綴り」を（一）の中につけ加えた。現代音が、上古・中古音から、著しく不規則な変化をしたものについては、「……」の形によって、つながりが不明なことを示した。

（ロ）さして基本ではない漢字については、「……」のようにして「広韻」にみえる同音字をあげ、ローマ字による音の変遷を省略した。ただし、そのさい、上古音は必ずしも同じではない。

（ハ）同じ字について「広韻」にいくつもの発音が示されているときは、意味の違いがある場合は列挙し、そうでないときは、一部省略した。また、現代音は、「新華字典」と「中日大辞典（愛知大学編）」に収録されているものを重点的に示した。

（八）意味の記述と品詞

（イ）**（動）** の下に、親字の意味を①②③……の順に解説した。そのさい、その漢字の成り立ちにもとづく原義を第一として、順次、派生義に及ぶように配慮した。

（ロ）同音による借用義は、▽の下に「……」に当てた用法として説明した。

（ハ）常に二字以上の熟語の形で用いられるものや、外国語をあらわす仮借の用法（当て字）などは、左のような形で説明した。

（例）**（動）** ① 勿論とは、あたし、心ざらなさま。

（ニ）親字の意味を用法上から品詞に分類して示した。そのさいの品詞の分類は、漢語の文法で一般に使われるものによった。☆略語・記号一覧

（ホ）漢字本来の意味と異なった日本語特有の意味・用法がある場合は**（国）**の記

号のあとに、①②③……の順にその意味を説明した。そのさい、品詞名は省略した。また、起源的に同じ仲間だと思われるものは、①②③の中を、④⑤⑥……に細分した。

（ハ）**（国）**の場合、その漢字が一字で単独に読まれるものは、その読みを太字のひらがなで示した。

（例）**（国）** ① もよおす（イ）用意を調えて行事を行う。
また、宴を行う、「開催」

（ロ）その漢字の意味に、同義・反義・類義の漢字がある場合は、**（同）**・**（反）**・**（類）**の記号の下に、それらの漢字を示した。

（九）用例

親字の意味の理解をたすけるために、中国古典および、日本漢文の中から用例を採録した。その場合、原文に歴史的かなづかいで読み下し文をつけた。成り立ち

（イ）すべての親字に、その漢字の成り立ちを**（圃）**の記号の下に解説した。また、基本的な漢字には、甲骨文字・金文（金石の字）・古文・籀文・篆文・小篆・楷書に至る字形の変遷図をつけた。そのさい、その漢字の成り立ちの理解をたすけるために、他の漢字の偏旁で金文・古文として示したものもある。

（ロ）漢字の成り立ちおよび、意味の理解をさらに深めるために、単語家族に分類した同系の漢字の解説を補足した。

（ハ）日本語の訓が同じで、意味に違いがある漢字（同訓異義字）については、成り立ちの解説のあとに、その違いを解説した。

（十）古訓

（イ）**（新撰字鏡）**・**（倭名類聚抄）**・**（類聚名義抄）**（観智院本・図書寮本）から、その漢字の訓を採録して、**（圃）**の記号の下にカタカナで示した。ただし、観智院本については、漢字の部分はそのままにした。また、異体字として**（圃）**の記号の下に示した漢字および、筆写によって字形が異なるものの訓も採録した。

（ロ）採録にあたってはなるべく本文に従った。それぞれの索引を参照して、疑問のあるものも、*印をつけて採録した。

（ハ）**（倭名類聚抄）**で、四等官に該当するものは、長官・次官・判官のみを、また、地名は旧国名のみを採録した。図書寮本は、その索引のみを使用し、観智院本で「……」のように表記されているものは、「アタル・（アツ）」の形で示した。

（ニ）親字の意味説明が「AB」とはの形になっているものは、「A」の親字のところにだけ示した。

（ホ）配列は、資料の成立年代の古い順にした。ただし、同一資料の中は、五十音順にした。☆出典一覧

(三) 名のり

当用漢字・人名用漢字には、**名**の記号の下に、その漢字が人名として一般に用いられる訓読みを、五十音順に示した。

(三) 親字が下につく熟語

▽の記号の下に、その親字が下になって構成される二字の熟語を画数順に示した。

(四) 検索

(イ)旧字体および、異体字は、その所属する部首・画数の末尾に、検索のための見出しをたてた。

(ロ)部首の判別しにくい漢字については、その漢字の部首を除いた画数の末尾に検索のための便宜上の見出しをたてて検出できるように配慮した。

(一) 熟語について

(一) 収録範囲

熟語は、左の基準によって、約七万語を収録した。

(イ)中国のおもな古典にみえる語句・故事成語・おもな人名と地名。

(ロ)中国のおもな古典の書名および、漢文で表記されている日本の書名。

(ハ)日本のおもな古典にみえる語句および、現代生活に必要と思われる難読の語。

(ニ)仏典にみえるおもな仏教語。

(二) 配列方法

(イ)熟語の二字目の画数の順による。二字目が同画の場合は、その漢字の読みの五十音順。

(ロ)一点読みをする熟語は、熟語の末尾。

(三) 見出しの体裁

熟語の見出しは、左のように示した。

(例)

【傍観観】ヨウカンカン

a —
b —
c —

d —
e —

【了(了)承】リョウジョウ

a 旧字体
b 現代かなづかいによる読み
c 歴史的かなづかいによる読み
d 「当用漢字表」にない漢字を示す記号
e 同音の漢字による書きかえ字

(イ)二字目以下の漢字が「当用漢字字体表」の漢字と著しく異なる場合は、その漢字を(ハ)の中に示した。

(ロ)「当用漢字表」にない漢字には、その漢字の右上に*のしるしをつけた。また「当用漢字補正資料」により、「当用漢字表」に加えられる漢字には、その漢字の右上に+のしるしをつけた。

(ハ)国語審議会報告資料の「同音の漢字による書きかえ」に該当する熟語は、書きかえる漢字を(ハ)の中に示した。

(四) 読み

(イ)熟語の読みは、現代かなづかいによって、音読みはカタカナ、訓読みはひらがなで、語構成にしたがって二行にわけて示した。そのさい、現代の字音かなづかいが歴史的な字音かなづかいと異なるものは、その歴史的かなづかいを(ハ)の中に示した。ただし、従来のものに異説があっても、まだ定着していないときには、便宜上、従来のままの歴史的かなづかいを示したので、親字の場合と異なる場合もある。また、梵語や外国語からの音訳語、当て字による日本語の読みなどは、語構成を無視して一行で示した。

(ロ)熟語の読み二つ以上ある場合は、一般的な読みを先に示した。

(ハ)音読みと、返り点読み二つがある場合は、音読みを先に示した。

(ニ)読みの違いによって意味が異なる場合は、**日**の記号で区別した。

(五) 意味の配述

(イ)意味の記述は、その熟語の原義に近い順に①②……とした。

(ロ)日本語特有の意味がある場合は、「**国**」の記号の下に、その意味を説明した。

(ハ)その熟語が、仏教語・俗語である場合は「**仏**」「**俗**」の記号で示した。【俗】には、宋・元・明の俗語から現代中国語まで含まれる。読みは音読みとしたが、とくに現代俗語については、北京語の読み方をカタカナで示した。

(ニ)その熟語に、同音同義・異音同義、および、反対の意味の熟語がある場合、また、偏が異なるので、同音同義の熟語がある場合は、それぞれ、**国**・**国**・**国**の記号をつけて、その熟語を示した。

(ハ)熟語で、下にくる漢字の意味の理解をたすける必要がある場合には、▽の下に、その漢字の意味を簡単に説明した。

(六) 用例と出典

(イ)熟語の意味の理解をたすけるために、中国の主要古典および、日本漢文の中から採録した用例を示した。その際、その熟語の典拠を示すために、たんに出典名のみを示したこともある。

(ロ)その熟語の典拠である用例が熟語の見出しの形と同一でないものは、▽の下にそのことを説明した。

(七) 古訓

意味とは関係なく、日本の古訓資料にみえる訓を、**古**の記号の下に示した。その体裁は親字の場合と同じ。

(八) 検 索

(イ)音読みと返り点読みとの二つの読み方がある熟語のうち、重要と思われるものについては、返り点読みをする見出しを、検索のために熟語の末尾に立てた。
(ロ)同音の漢字による書きかえ、資料によって書きかえる熟語は、検索見出しをたてた。

(九) 参照項目

付録で解説してある事項については、各付録「中国の文字とことば」のよう

■ 付録について(省く)

付録には、漢字・漢文・中国語・中国史・中国文化などの理解に役立つように左の六つの内容を収録した。

- (一)「中国の文字とことば」……漢字の成り立ち、漢字の字体の変遷、漢字の音、中国語の音韻体系の変遷、「広韻」「韻鏡」「詩韻」「中原音韻」などの解説、日本の上代特殊かなづかい、吳音・漢音・唐宋音の由来などの解説。
- (二)「中国の名著」……「詩経」から「紅樓夢」にいたる、中国の思想・文学・歴史・地理・芸術・言語・文字などに関する重要な書物三二〇点の解説。
- (三)「中国簡体字表」……現在、中国で使用されている簡体字、その繁体字(旧字体)、日本の当用漢字の比較一覧表。
- (四)「中国の詩」……詩型を中心にした「詩経」から現代詩までの解説。
- (五)「中国文化史年表」……文化史を中心においた、中国史の年表と解説。
- (六)「中国歴史地図」……中国の歴史および文化に関係ある四色刷りの地図。

《出典名一覧》

本書で引用した出典名のうち、略称を用いたもののみを左に示す。篇名も、適宜、簡略にして示した。

易経(周易)	〔易・乾〕	戦国策	〔国策・秦〕
書経(尚書)	〔書・堯典〕	呂氏春秋	〔呂覽・為欲〕
詩経(毛詩)	〔詩・周南・關雎〕	孔子家語	〔家語・三恕〕
春秋左氏伝	〔左伝・昭二〇〕	世説新語	〔世説・言語〕
春秋公羊伝	〔公羊・宣一三〕	列女伝	〔列女・鄭孟軻母〕
春秋穀梁伝	〔穀梁・文一〇〕	白虎通義	〔白虎通〕
論語	〔論・学而〕	風俗通義	〔風俗通〕
孟子	〔孟・梁上〕	經典積文	〔經典〕
韓非子	〔韓非・顯学〕	説文解字	〔説文〕

後漢書

三国志

〃

旧唐書

新唐書

資治通鑑

古事記

〔後漢・光武〕

〔魏志・武帝〕

〔蜀志・劉焉〕

〔吳志・孫堅〕

〔旧唐・高祖〕

〔新唐・太宗〕

〔通鑑・漢高祖元〕

《略語・記号一覧》

① 吳音・漢音・唐宋音・慣用音
② 平声・上声・去声・入声

〔名〕 名詞

〔動〕 動詞

〔形〕 形容詞

〔副〕 副詞

〔助動〕 助動詞

〔接統〕 接統詞

〔感〕 感動詞

〔指〕 指示詞

〔前〕 前置詞

〔代〕 代名詞

〔疑〕 疑問詞

〔助〕 助詞・接頭辭・接尾辭

〔單位〕 單位詞

〔數〕 數詞

〔親〕 親字の意味

〔解〕 漢字の成り立ちの解説

〔訓〕 古訓資料

〔字〕 異体字関係

〔名〕 人名としての訓読み

〔例〕 当用漢字の音調とその例、および、参考事項の解説

日本書紀

日本外史

新撰字鏡

倭名類聚抄

類聚名義抄

図書寮本

観智院本

〔紀・神代〕

〔頼山陽・外史〕

〔新〕

〔和〕

〔図名〕

〔観名〕

反義の親字・熟語

異音同義の親字・熟語

偏が異なるので、同音

同義の熟語

補説、参考事項の解説

語

俗語

仏教語

日本語特有の熟語の意味

当用漢字表にない漢字

当用漢字補正資料で当用

漢字表に加えられる漢字

当用漢字

六年の配当漢字に繰り下

げられた当用漢字

教育漢字

人名用漢字

当用漢字補正資料で当用

漢字表に加えられる漢字

国字

甲骨文字

金石文字

古文

籀文

篆文

楷書

意味 ㊦ (名) ひのと 十干ジツの四番め。▽五行では火に当てる。日本の兄弟はの「ひのと」は、「火の弟」

②(勤)あたる 年順・時・役目にあたる。「丁憂」

③〔名〕壮年の男。「成丁」

④〔名〕人夫。「園丁」

⑤(形)ちようどしおどきにあたつて盛んであるさま。

③「丁丁々々々」とは、物がうちあたる音などの形

【国】①書物の紙数を数えることは、紙面の表裏二

②町の通路のこと。▽町に当てた用法。

③距離の単位。一丁は六十間で約一〇九メートル。
④ちよう(ちやう)さいころの目で、偶数。対半。

解字 甲骨・金文は特定の点
またはその一点に打ち
こむぎの頭を描
いた象形文字。篆

□—□—↑—丁
文ツは丁型に書

系のこと。また、直角にあたることでは、頂^{ナカ}（垂線^{ナカ}）の原字。一点に止まることでは、停止^{ナカ}と同

【下平】^{カキコト} 四声で平声の一つ。付録中国の文字のこと。
【下付】^{カキコト} 政府役所が金貨の証明書許可書などを一般の人に渡し与えること。下附。
【下民】^{カキコト} 世の中の人。人民のこと。
【下向】^{カキコト} ①都から地方へいく。②神仏に参拝して帰ること。
【下交】^{カキコト} ①上と交際して、身分の高い人が身分の低い人と交際すること。②下交。
【下句】^{カキコト} 上句・中句に対して、月の二十一日から月末までの十日間。
【下地】^{カキコト} ①地味の色。②土。③上天に対して、地面。④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

【下学】^{カキコト} ①上級に対して、下級の者。②自分の下位の者。③自分の下位の者。④自分の下位の者。⑤自分の下位の者。⑥自分の下位の者。⑦自分の下位の者。⑧自分の下位の者。⑨自分の下位の者。⑩自分の下位の者。⑪自分の下位の者。⑫自分の下位の者。⑬自分の下位の者。⑭自分の下位の者。⑮自分の下位の者。⑯自分の下位の者。⑰自分の下位の者。⑱自分の下位の者。⑲自分の下位の者。⑳自分の下位の者。㉑自分の下位の者。㉒自分の下位の者。㉓自分の下位の者。㉔自分の下位の者。㉕自分の下位の者。㉖自分の下位の者。㉗自分の下位の者。㉘自分の下位の者。㉙自分の下位の者。㉚自分の下位の者。㉛自分の下位の者。㉜自分の下位の者。㉝自分の下位の者。㉞自分の下位の者。㉟自分の下位の者。㊱自分の下位の者。㊲自分の下位の者。㊳自分の下位の者。㊴自分の下位の者。㊵自分の下位の者。㊶自分の下位の者。㊷自分の下位の者。㊸自分の下位の者。㊹自分の下位の者。㊺自分の下位の者。㊻自分の下位の者。㊼自分の下位の者。㊽自分の下位の者。㊾自分の下位の者。㊿自分の下位の者。

【下品】^{カキコト} 上品に対して、卑しい地位。①上品。②上品。③上品。④上品。⑤上品。⑥上品。⑦上品。⑧上品。⑨上品。⑩上品。⑪上品。⑫上品。⑬上品。⑭上品。⑮上品。⑯上品。⑰上品。⑱上品。⑲上品。⑳上品。㉑上品。㉒上品。㉓上品。㉔上品。㉕上品。㉖上品。㉗上品。㉘上品。㉙上品。㉚上品。㉛上品。㉜上品。㉝上品。㉞上品。㉟上品。㊱上品。㊲上品。㊳上品。㊴上品。㊵上品。㊶上品。㊷上品。㊸上品。㊹上品。㊺上品。㊻上品。㊼上品。㊽上品。㊾上品。㊿上品。

【下】^{カキコト} ①官吏登用試験に落第する。②試験の成績が非常に悪い者。③試験の成績が非常に悪い者。④試験の成績が非常に悪い者。⑤試験の成績が非常に悪い者。⑥試験の成績が非常に悪い者。⑦試験の成績が非常に悪い者。⑧試験の成績が非常に悪い者。⑨試験の成績が非常に悪い者。⑩試験の成績が非常に悪い者。⑪試験の成績が非常に悪い者。⑫試験の成績が非常に悪い者。⑬試験の成績が非常に悪い者。⑭試験の成績が非常に悪い者。⑮試験の成績が非常に悪い者。⑯試験の成績が非常に悪い者。⑰試験の成績が非常に悪い者。⑱試験の成績が非常に悪い者。⑲試験の成績が非常に悪い者。⑳試験の成績が非常に悪い者。㉑試験の成績が非常に悪い者。㉒試験の成績が非常に悪い者。㉓試験の成績が非常に悪い者。㉔試験の成績が非常に悪い者。㉕試験の成績が非常に悪い者。㉖試験の成績が非常に悪い者。㉗試験の成績が非常に悪い者。㉘試験の成績が非常に悪い者。㉙試験の成績が非常に悪い者。㉚試験の成績が非常に悪い者。㉛試験の成績が非常に悪い者。㉜試験の成績が非常に悪い者。㉝試験の成績が非常に悪い者。㉞試験の成績が非常に悪い者。㉟試験の成績が非常に悪い者。㊱試験の成績が非常に悪い者。㊲試験の成績が非常に悪い者。㊳試験の成績が非常に悪い者。㊴試験の成績が非常に悪い者。㊵試験の成績が非常に悪い者。㊶試験の成績が非常に悪い者。㊷試験の成績が非常に悪い者。㊸試験の成績が非常に悪い者。㊹試験の成績が非常に悪い者。㊺試験の成績が非常に悪い者。㊻試験の成績が非常に悪い者。㊼試験の成績が非常に悪い者。㊽試験の成績が非常に悪い者。㊾試験の成績が非常に悪い者。㊿試験の成績が非常に悪い者。

